

タイトル	ロシアの地名について(2) : ヴラチーミル州の河川の名の起源
著者	寺田, 吉孝; TERADA, Yoshitaka
引用	開発論集(91): 179-185
発行日	2013-03-14

## ロシアの地名について(2)

### —— ヴラヂーミル州の河川の名の起源 ——\*

寺 田 吉 孝\*\*

スラヴ人がヨーロッパ・ロシアに住み始めるまでに、先住民族、すなわち、フィン・ウゴール系諸種族や印欧語族バルト諸種族の言語名称が川に付けられていた。そして、それらの名称の多くが現在に至るまで残っている。ロシア地名辞典の著者であるポスペロフが「川の名称は、地名の中で最も保守的であり、特に大河川ほど古い名称を残している傾向がある<sup>1</sup>。」と言っているように、川はその名をめったに変えない。例えば、ヨーロッパ最大の川であり、ロシアで「母なるヴォルガ」と呼ばれているヴォルガ川でさえも、スラヴ語起源の名称ではなく、先住民族の言語起源である可能性が高い<sup>2</sup>。

ロシアの川の名が保守的であるということはよく指摘されることなのだが、実際にどの程度保守的なのか、また、他の地域の川の名と比べても保守性が強いのかということには触れられていない。本稿では、中世ロシアの中心地であるヴラヂーミル、スーズダリが位置するヴラヂーミル州の川の名称を例に挙げ、ロシアの川の名称がどの程度保守的なのかを検討していく。

考古学データや古ルーシの年代記の記述によって、現在のヴラヂーミル州付近の9～12世紀頃の情報を知ることができる。この地域の居住者は、何千年かの間に移り変わりがあったが、スラヴ諸種族がこの地へ入る8～9世紀頃までにはモルドヴァー、ムロマー、メーリャ、ヴェーシなどのフィン・ウゴール系諸種族が定住していたと想定される。そして、その後、クリヴィチ、ヴァチチ、スロヴェネなどのスラヴ諸種族がこの地域へ移住を始め、フィン・ウゴール系の人々を同化していったとされている<sup>3</sup>。その結果、フィン・ウゴール系の諸言語は、川や湖、古い都市などの名称を残すのみで、言語そのものはこの地に残らなかった。

<sup>1</sup> Поспелов Е. М. Географические названия России: топонимический словарь. Москва, 2008. стр. 15-16

<sup>2</sup> フィン・ウゴール語系言語起源説とバルト語系言語起源説が有力であるが、解釈が定まっていない。また、スラヴ語系言語起源説も消え去ってはいない。Поспелов Е. М. Географические названия России: топонимический словарь. Москва, 2008. 5, стр. 143 及び Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Издание второе, стереотипное. Москва, 1987, стр. 336-337

<sup>3</sup> Копылов Д. И. История Владимирского края. Владимир, 2004, стр. 15

\* 本稿の一部は2009年度北海学園大学学術助成（一般研究）「ヨーロッパ・ロシアにおける非スラヴ語起源の地名の研究」によるものである。

\*\* (てらだ よしたか) 開発研究所研究員, 北海学園大学人文学部教授

まず、現在市販されているヴラヂーミル州の地図<sup>4</sup>から、記載されている川を250挙げる事ができた。そして、その流路延長と流域面積は、インターネット上で公開されている全国水資源一覧データ検索 (Поиск по данным государственного водного реестра)<sup>5</sup>によって、ほぼ全てを調べることができた。そして、本稿では、流路面積が50 km以上の比較的大きな川に絞り、その名の起源を調べてみた<sup>6</sup>。

表1のように、流路延長が50 km以上の川は全部で28あった。その57%の16河川がフィン・ウゴール系言語起源の名称、その21%の6河川がスラヴ系言語起源の名称を有している。これらの川の名の起源がどの言語であるかは意見の一致を見ているが、その名の意味が何であ

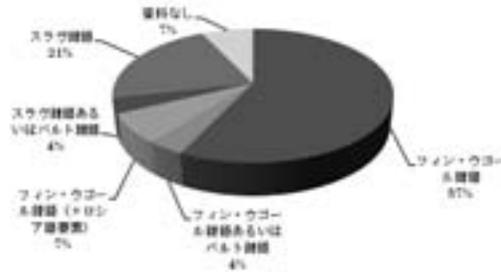
表1 ヴラヂーミル州の河川名の起源

	河川名	流路延長(km)	流域面積(km <sup>2</sup> )	河川名の起源
1	Ока	1498.6	245000	諸説 (バルトあるいはフィン・ウゴール)
2	Клязьма	686	42500	フィン・ウゴール
3	Нерль	284	6780	フィン・ウゴール
4	Лух	240	4450	フィン・ウゴール
5	Увель	185	3770	スラヴ
6	Дубна	167	5350	諸説 (スラヴあるいはバルト)
7	Ушна	160	3060	フィン・ウゴール
8	Колокша	148	1430	フィン・ウゴール
9	Гусь	147	データなし	フィン・ウゴール
10	Киржач	133	1820	フィン・ウゴール
11	Пекша	127	1010	フィン・ウゴール
12	Суворощь	126	データなし	フィン・ウゴール
13	Унжа	122	1320	フィン・ウゴール
14	Судогда	116	1900	フィン・ウゴール
15	Бужа	92	1520	スラヴ
16	Шерна	89	1890	フィン・ウゴール
17	Кубрь	87	1010	スラヴ
18	Молокча	77	データなし	フィン・ウゴール
19	Ворша	71	328	フィン・ウゴール
20	Ирмес	70	662	資料なし
21	Большой Киржач	70	データなし	フィン・ウゴール (+ロシア語要素)
22	Малый Киржач	69	413	フィン・ウゴール (+ロシア語要素)
23	Селекша	68	395	フィン・ウゴール
24	Поль	65	データなし	スラヴ
25	Серая	60	381	スラヴ
26	Большая Липня	55	272	スラヴ
27	Шередарь	51	269	フィン・ウゴール
28	Волга	51	データなし	資料なし

<sup>4</sup> Региональный атлас «Владимирская область». Москва, 2002

<sup>5</sup> Поиск по данным государственного водного реестра. (<http://textual.ru/gvr>) (2012年8月10日閲覧)

<sup>6</sup> 主に、文献1～5を参考にした。



ヴラデーミル州の河川名の起源

るかは特定できない場合もある。また、バルト系言語起源説とフィン・ウゴール系言語起源説の両説あるオカ川(Ока)、スラヴ系言語起源説とフィン・ウゴール系言語起源説の両説あるドゥブナ川(Дубна)もある。また、ポリショイ・キルジャチ川(Большой Киржач)とマールイ・キルジャチ川(Малый Киржач)は、キルジャチ(Киржач)というフィン・ウゴール系言語起源の名に、ロシア語のポリショイ(большой)とマールイ(малый)が付加された名称である。ところで、ИрмесとВольгаは、その名の起源に関して記述されている資料を手に入れることができなかった。Вольгаに関しては、Волгаと同じ起源の名であろうと説明している文献もあるが<sup>7</sup>、それ以外の資料を見つけることはできなかった。

ところで、歴史家のV. O. クリュチェフスキイが指摘しているように、「村や河川のフィンとルーシ<sup>8</sup>の名称は連続した地帯をなしておらず、かわるがわるとびとびになっている。すなわちルーシ植民者はフィン人の地方に大集団をなして押し寄せたのではなく、言うなれば細い流れをなして浸透して、沼沢と森林の間に散在するフィン人の部落部落の間に残された広大な合間を占めた。こういう植民者の分布体制は、彼等と原住民とのほげしい闘争の下では生じえなかったものであろう<sup>9</sup>」。クリュチェフスキイのこの指摘は、現在に至るまで繰り返し引用されているが<sup>10</sup>、この指摘のとおりであれば、ルーシ移民は、フィン・ウゴール系諸種族が居住していなかったところに住み始めるので、その地域にスラヴ語起源の地名がある可能性が高いということになるのであろう。上記6つのスラヴ語起源の河川の内、ウヴォヂ川、ブジャ川、クブリ川、ポリ川、ポリシャヤ・リプニャ川の5つは、人口の少ない地域を流れている。比較的人口の多い地域にあるのは、アレクサンドロフ市<sup>11</sup>を流れているセラヤ川だけである。一方、他の人口の多いところを流れているのは、非スラヴ語起源の名の川である。例えば、ヴラデーミル市を流れ

<sup>7</sup> Поспелов Е. М. Географические названия России: топонимический словарь. Москва, 2008. стр. 143

<sup>8</sup> ここでは、東スラヴ諸種族を指していると考えられる。

<sup>9</sup> Ключевский В. О. Курс русской истории Часть 1. Петроград, 1925. стр. 365 (訳文は、八重樫喬任訳、『ロシア史講話1』, 東京, 1979年, p.350から)

<sup>10</sup> 例えば、参考文献6にも引用が見られる。

<sup>11</sup> 14世紀、モスクワ公イワン・カリタの書簡の中で、アレクサンドロフ村(Александровская слобода)という名ではじめて言及されている。それ以前、この周辺は、主に狩猟場として使われていた。

Горкин А. П. и др. География России: энциклопедия. Москва. 1998. стр. 23.

るクリヤジマ川，スーズグリ市を流れるネルリ川，グーシ・フルスターリ市を流れるグーシ川，ユーリエフ・ポリスコイ市を流れるコロクシャ川などのフィン・ウゴール系言語起源の名を持つ川である。フィン・ウゴール語系起源の地名が残っている地域には，フィン・ウゴール系諸種族が先に居住しており，その後，ルーシ諸種族が侵入し定住し始めて，同化していったと推測される。

話を北海道の地名に転じ，ヴラデーミル州の地名と比較してみよう。ご存知のように，北海道の先住民族はアイヌ民族である。13世紀頃まで北海道には日本人の居住地はなかったようであるが，15世紀頃から日本民族による北海道への植民が活発に行われ始めた。その際，アイヌの人々と日本人のあいだで少なからぬ争いがあった<sup>12</sup>。現在では，アイヌ語を話す人の数が激減し，アイヌ民族の日本民族への同化は著しい。しかし，アイヌ語起源の地名は数多く残っており，その研究もかなり進んでいる。特に，山田秀三は，松浦武四郎，永田方正，知里真志保などの成果を反映させながら，アイヌ語地名に関して数多くの業績を残した。その後も多くのアイヌ語学者によってより正確な地名解釈を目指して研究が続けられているが，本稿では，主に，最も網羅的に書かれた山田秀三の著作<sup>13</sup>に基づき下記の資料を作成した。調査対象として，流路延長 50 km 以上の比較的大きな河川を取り上げた。流路延長と流域面積に関しては，北海道河川課によって，昭和 44 年発行された『北海道河川一覧』に基づいた資料<sup>14</sup>を参考にした。

表 2 北海道の河川名の起源

	河川名		流路延長(km)	流域面積(km <sup>2</sup> )	河川名の起源
1	天塩	テシオ	289.7	5594.3	アイヌ語
2	石狩	イシカリ	269.4	14375.6	アイヌ語
3	十勝	トカチ	223	8226.2	アイヌ語
4	空知	ソラチ	172.7	2705.5	アイヌ語
5	釧路	クシロ	172.3	2785.1	アイヌ語
6	雨竜	ウリュウ	160.3	1587.2	アイヌ語
7	利別	トシベツ	149.8	2752.2	アイヌ語
8	夕張	ユウバリ	135.5	1420	アイヌ語
9	尻別	シリベツ	125.7	1631.7	アイヌ語
10	常呂	トコロ	120.2	1968.2	アイヌ語
11	風連	フウレン	109.5	960.7	アイヌ語
12	千歳	チトセ	107.9	1225	日本語
13	沙流	サル	103.8	1342.5	アイヌ語
14	阿寒	アカン	98.4	658.7	アイヌ語
15	音更	オトフケ	94.5	734.1	アイヌ語
16	網走	アバシリ	93.6	1367.3	アイヌ語

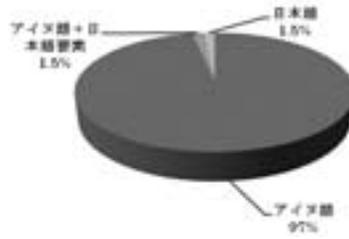
<sup>12</sup> 田端宏・桑原真人監修，『アイヌ民族の歴史と文化』，東京，2000年，pp.25-26

<sup>13</sup> 山田秀三，『北海道の川の名』，札幌，1971年

山田秀三，『北海道の地名』，札幌，1984年

<sup>14</sup> 上記の『北海道の川の名』に所収されている。

	河川名		流路延長(km)	流域面積(km <sup>2</sup> )	河川名の起源
17	佐呂間別	サロマベツ	90.9	859.2	アイヌ語
18	浦幌	ウラホロ	87.2	474.9	アイヌ語
19	湧別	ユウベツ	86.7	1454.1	アイヌ語
20	サロベツ	サロベツ	85	630.5	アイヌ語
21	渚滑	ショコツ	83.6	1162.9	アイヌ語
22	札内	サツナイ	82	707	アイヌ語
23	後志利別	シリベシトシベツ	80.1	722.9	アイヌ語
24	士別	シベツ	77.9	671.1	アイヌ語
25	西別	ニシベツ	77.5	449.6	アイヌ語
26	新冠	ニイカッパ	77.3	402.1	アイヌ語
27	鷓	ム	76.8	1240.9	アイヌ語
28	然別	シカリベツ	75.4	683	アイヌ語
29	無加	ムカ	74.6	536.1	アイヌ語
30	頓別	トンベツ	74.5	800.4	アイヌ語
31	美里別	ビリベツ	73.9	613.5	アイヌ語
32	豊平	トヨヒラ	72.5	904.8	アイヌ語
33	当別	トウベツ	72.5	309.5	アイヌ語
34	美瑛	ビエイ	72.2	704.2	アイヌ語
35	茶路	チャロ	71.4	353.7	アイヌ語
36	静内	シズナイ	68	649.8	アイヌ語
37	第二西丸別	ダイニシマルベツ	67.6	6.4	アイヌ語+日本語要素
38	庶路	ショロ	66.8	318.7	アイヌ語
39	歴舟	レキフネ	64.7	558.5	アイヌ語
40	名寄	ナヨロ	63.7	756.9	アイヌ語
41	広尾	ヒロオ	62.7	79.6	アイヌ語
42	遠別	エンベツ	62.5	362.1	アイヌ語
43	小平薬	オピラシベ	61.7	465.2	アイヌ語
44	足寄	アショロ	60.7	533.5	アイヌ語
45	古丹別	コタンベツ	60.3	412	アイヌ語
46	久著路	クチョロ	60.2	148	アイヌ語
47	雪裡	セツリ	59.8	495.2	アイヌ語
48	猿払	サルフツ	59.5	361.4	アイヌ語
49	糠平	ヌカピラ	58.7	384.3	アイヌ語
50	幾春別	イクシュンベツ	58.7	341	アイヌ語
51	忠別	チュウベツ	57.9	1031.5	アイヌ語
52	羽幌	ハボロ	57.3	269.3	アイヌ語
53	芦別	アシベツ	55.8	450.7	アイヌ語
54	斜里	シャリ	54.5	565.6	アイヌ語
55	安平志内	アベシナイ	54.5	320.8	アイヌ語
56	猿別	サルベツ	53.7	443.5	アイヌ語
57	興部	オコッペ	53.6	308.3	アイヌ語
58	厚真	アヅマ	52.3	382.9	アイヌ語
59	当幌	トウホロ	51.2	145.3	アイヌ語
60	仁々志別	ニニシベツ	50.9	150.1	アイヌ語
61	徳富	トッパ	50.8	313.9	アイヌ語
62	余市	ヨイチ	50.2	455.1	アイヌ語



北海道の河川名の起源

表2のように、流路延長 50 km 以上の川は全部で 62 ある。その内 60 はアイヌ語起源の名を有している<sup>15</sup>。62 の河川名の内、日本語起源は千歳川だけである。これも以前は、シコツ (shi-kot 大・沢) というアイヌ語起源の名で呼ばれていたが、シコツは「死骨」に通じるのでゆゆしい名ということで改名された<sup>16</sup>。また、第二西丸別川は、アイヌ語地名(「丸別」)に日本語要素(「第二」,「西」)が混ざったものである。なお、山田 (1984) によれば、豊平川は、元来サツポロと呼ばれていたが、川が流れる近辺の地名トイピラ (tui-pira 「崩れる崖」) という名が付けられた<sup>17</sup>。豊平もアイヌ語起源の地名なので、表2では、豊平川もアイヌ語起源の地名として取り扱った。

ここで、ヴラザーミル州の川の話に戻るが、上掲のクリュチェフスキの見解は、フィン人が居住していた地域にはルーシ人が大集団をなして植民しなかったので、フィン・ウゴール系言語起源の地名が残ったと解釈できる。しかし、現在、フィン・ウゴール系言語起源の名の川が流れる地域に、人口の多い地域が集中しているということは、そこにルーシ人の大量の植民が行われた事実があったことを物語っている。北海道においてアイヌ語起源の川の名が圧倒的に多いということを考慮すると、ルーシ人によって征服された土地に征服された先住民族のフィン・ウゴール系言語の地名が残ることも十分考えられるであろう。

ヴラザーミル州と北海道の河川名の起源から、次のことが言えるであろう。

1. 大きな河川は、先住民族の言語起源の名を残す傾向があり、地名の中でもかなり保守的であると言えるだろう。しかし、ヴラザーミル州の河川名が他の地域の河川名よりも保守的であるとは言えない。

<sup>15</sup> アイヌ語は文字を持たない言語であったので、アイヌ語発音に漢字をあてて表記した。そのため、漢字の読みに引きずられ、次第にアイヌ語の元の発音とはかけ離れたものになった地名が数多くある。アイヌ語地名の元の発音を守るため、アイヌ語地名を公の看板や標識に漢字名と併記するよう行政に訴える団体「アイヌ語地名を大切に！ 市民ネットワーク」が組織され、活動が行われている(小野有五,『アイヌ語地名の併記を考える』,「ことばと社会 1号」,東京,1999年,pp.78-86)。

<sup>16</sup> 山田秀三,『北海道の地名』,札幌,1984年,p.55

<sup>17</sup> 上掲書 p.29

2. 先住民族の言語起源の地名が数多く存在しているということは、平和に同化が行われたということを示す指標ではない。

#### 参考文献

1. Поспелов Е. М. Географические названия России: топонимический словарь. Москва, 2008.
2. Копылов Д. И. История Владимирского края. Владимир, 2004.
3. Региональный атлас «Владимирская область». Москва, 2002.
4. Поиск по данным государственного водного реестра (<http://textual.ru/gvr>).
5. Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Издание второе, стереотипное. Москва, 1987.
6. Кириллов С. Чёрная река. Владимирские ведомости №56. 7 марта 1989.
7. Титова В. Реки, речки и пруды... Владимирские ведомости №48. 2 декабря 2009.
8. Богоявленский Л. Пекша, Сомша, Кучебша... Вперёд. 17 марта 1992.
9. Наше Ополье (<http://nasheopolie.ru/>).
10. Ключевский В. О. Курс русской истории. часть 1. Петроград, 1925.
11. クリュチェフスキーV. O./八重樫喬任訳, 『ロシア史講話1』, 東京, 1979年
13. Горкин А. П. География России. Москва, 1998.
14. 『日本地名大百科』 Land Japonica. Tokyo, 1996.
15. Мурзаев Э. М. Слово на карте. Москва, 2001.
16. 山田秀三, 『北海道の川の名』, 札幌, 1971年
17. 山田秀三, 『北海道の地名』, 札幌, 1984年
18. 小野有五, 『アイヌ語地名の併記を考える』, 「ことばと社会 1号」, 東京, 1999年